異文化言語教育評価論特論

3. 学習指導要領は英語学力をどのように定義してきたのか

学習指導要領に見る構成概念，「コミュニケーション」という用語の曖昧さ，学習指導要領と評価基準の設定

年	目標	特徴	改善点
1947(昭 22)	英語で考える習慣、聞き話し、読み書き、英語話者、その習慣について知る		
1951(昭 26)	4 技能の統合	下位能力の例示あり	
1956(昭 31)	英語文化理解・自己文化向上	語彙数の規定 ex) 1 年：500-800 語 具体的な指示内容多い	自己文化について言及
1958(昭 33)	音声・語彙・文法事項を言語材料として 4 技能により運用	文法構造に基づくシラバス 語彙数の指定	→指導内容量を規制
1969, 1970		学習内容の削除 ex）中学 1100~1300 → 950 ~ 1100	生徒の能力差に対応した指導
1977(中学) 1978(高校)	初歩的な英語を用いて簡単な事柄を話し、聞き 初歩的な英文読解、書き	簡単な・初歩的な、が頻出	中学週 3 時間体制へ 指導内容・言語材料を削減
1987(昭 62)	実践的コミュニケーション能力の養成	学習普段を軽減 言語材料の実質的削減	計画的組織的指導を容易にする
1998（平 10）	実践的コミュニケーション能力重視と共に特に中学で聞く、話す、を重視	中学：機能語 100 語 総語数 900 語	ゆとり教育 週 5 日制
			目標基準準拠評価 観点別評価

■　英語学力観の歴史

テスト研究からみた構成概念の定義の要素があるが、英語運用能力の定義、各要素の関係付けるための定義が欠けている。

4. 言語評価研究おける言語能力

4.1 構成概念とその定義　--- 史的区分

■　Chalhoub-Deville & Deville(2005)　→本書では引用

①　能力ベース　②階層的　③パフォーマンス・ベース　④談話における相互関係

■　Bachman (2007)

①　技能と要素　②直接テスト　③語用論テスト　④communicative testing ⑤相互作用能力　⑥タスク・ベース言語運用テスト　⑦相互作用主義

■　Chapelle & Brindley (2002)

①　言語能力重視アプローチ：特定の言語使用場面を想定せず、抽象的能力として構成概念を定義

テストでの言語使用は潜在能力の結果

②　言語運用重視アプローチ：観察結果から実際どの程度言語が使えるか推測するためテストを使用

与えられたタスクが要求された作業を行えるかを検証

4.2　個人に内在する言語能力観に基礎をおいた構成概念の定義

4.2.1 個人に内在する能力としての言語能力観

前コミュニカティブの時代

■　Lado (1961)：４技能、発音、文法、語彙。自国文化の価値観の気づき

「外国語教育が生み出しうる最大の価値は教育そのものである」

■　Carroll(1968)

①　言語は規則の体系　②言語能力は相互に関係しあった一連の習慣から成り立つ　③顕現した言語能力を言語運用と呼ぶ　④言語能力、言語運用、共に個人差あり。

・刺激・応答・タスクに具体化し、音素、語彙、形態素と東吾に加え、すべてを統括した統合的言語運用として会話・聴解・読解・ライティング能力などと言語を概念化

・指導と評価と言語が一体化していた時期

4.2.2 ハイムズのコミュニケーション能力理論

■ Hymes(1971)：

・ 言語能力は社会で得られる経験、社会的ニーズ、経験によって促進される、動機、経験なども含む

・ チョムスキーの言語理論は、言語の社会的側面を捨象していると批判

・コミュニケーション能力を「言語を使用するための能力」と言い換えるが、習得は文法能力の習得と同様の語彙で記述することができる、と主張

■ ハイムズのコミュニケーション能力理論は、経験科学として検証可能性、精密性、包括性など様々な要件を追及しようとしており、言語の形式化というチョムスキーの試みより困難であるとされる。

4.2.3 外国語習得研究におけるコミュニケーション能力の定義

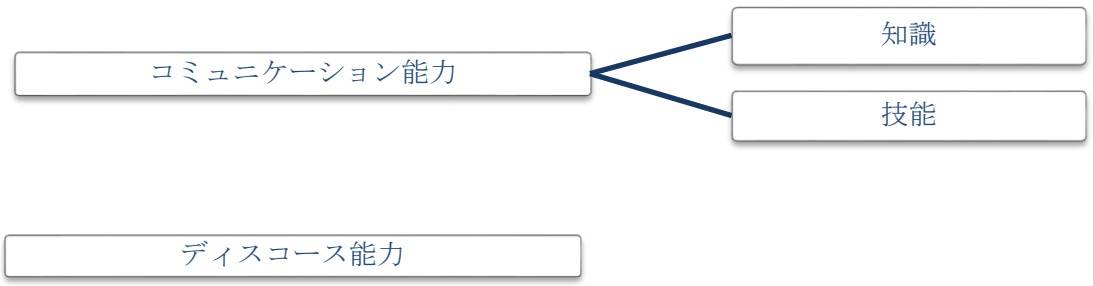
■ 1980 年代、母語を想定したハイムズの理論を第 2 言語習得に応用する試みが行われる

■ Canale & Swain (1980):

文法能力、社会言語的能力、方略的能力がコミュニケーション能力の最低限の構成要素である。

■ Canale(1983):

・能力を示す言語運用(performance)の代わりに、言語使用のサンプルを実際のコミュニケーション(actual communication)として区分。ハイムズが指摘した言語外要因を積極的に含めた。



■ Bachman &Palmer(1983):

→情意の介在、方略的能力の操作を受け、適切な言語使用が行われる

情意：不安などではなく、トピックに対する否定的感情など

■ Schachter(1990):

・コミュニケーション能力は文法能力と語用論的能力から成るが、文化的社会的規準は文法、音韻、統語、語用論すべてのレベルに影響を与えるのでは？

・社会言語的能力・方略的能力と同様に文法能力も重要

4.2.4 階層的言語能力論

■ Chalhoub-Deville & Deville(2005)

・階層的言語能力論は受験者の言語能力に関する認知的表象化の理論である、とし批判的。

・ACTFL： 4 技能を 5 段階に分け、各段階を記述子(descriptors)で特徴づける(CEFR, can-do 項目も同類)

→構成概念を階層的に示すに十分な理論的根拠、実証的証拠モデルが欠如と批判

■ Hulstijn(2008)

・CEFR levels の代案を提示

・言語運用の 3 種の可能性：a. 限られた場面での使用、良質の使用言語、 b. 広範囲の場面での使用、言語の質が劣る、 c.言語運用の範囲と使用言語の質が一致 (CEFR は a,b,の考慮が欠如)

→代案

第 1 段階:①言語使用場面で必要とされる機能を記述 ②記述された作業遂行のために必要な言語能力レベルを明示、文脈と切り離して言語知識のテストを行う→信頼性、妥当性の検証が容易

第 2 段階：合格者のみ対象とし、言語使用場面とタスクを与え、タスク遂行をテスト。→信頼性、妥当性の確保が困難

異文化言語教育評価論特論　（補足資料）

Chalhoub-Deville & Deville(2005) A look at and forward to what language tests measure. In E. Hinkel (Ed.) *Handbook of research in second language teaching and learning* (pp. 815 – 831). NJ: Lawrence Erlbaum.

構成概念の定義について、各時代を区分して考察。

① 能力ベースによる定義（前コミュニカティブ時代）

■ Lado(1961)

構造主義的アプローチであり、 skills(4 技能など)と elements(文法、語彙、文化的知識)で言語知識を測定。測定対象を performance（言語使用）ではなく、competence（能力）とした。

■ Carroll(1986)

言語テストとは言語パフォーマンスを測定すべき。(1)測定の統合化(発話・書く能力を統合させる) (2)テストの真正性(authenticity, real life)の面、の２点を重視すべき。

■ Canale & Swain (1980)

L2 の構成要素として、言語知識のみならず、実用的知識(pragmatic knowledge)を必要とした。Canale(1983)がさらにディスコース能力を加えた。(前回レジュメ p.2 参照)

■ Bachman & Palmer(1980)

Canale & Swain(1980)のコミュニケーション能力の測定を発展させた。言語知識のみでなく言語能力も含み、communicative language ability (CAL)model として定義づけた。

② 階層的（言語能力）による定義

ACTFL は広く用いられている一方、批判も多い

ACTFL に関する批判

■ 受験者のパフォーマンスを、能力または実生活での言語使用の規範(paradigm)と結び付けるモデルが欠けている。
■ ACTFL のガイドラインは表面上、真正性と学習者が実社会で行うパフォーマンスタスクを強調しているようにみえる。しかし、実際ガイドラインは、一般的で生徒の実際の必要性を調査することなく選択されている。